

[個別論文]

世界の民族・日本の民族

—「学びの杜・サマースクール」講座の試み—

今津 孝次郎*・賽 漢 卓 娜**

中村・五島パトリシア***・童 潔***

- | | |
|------------------|------------------|
| 序. 18歳人口減少期の高大連携 | 4. 中国南部の少数民族 |
| 1. 本講座の目的 | 5. 中国の少数民族とモンゴル族 |
| 2. 本講座の方法的特徴 | 6. ベルーの民族と日系人社会 |
| 3. 多文化における国籍と民族 | 7. 討議 |

序. 18歳人口減少期の高大連携

(1) 大学開放から見た高大連携

「象牙の塔」という言葉に如実に表わされていたように、大学はともすると社会のなかで閉鎖的傾向を持っていた。もちろん、それには大学が国家社会から超越するという側面があったが、社会との結びつきが弱かったことは否定できない。それに対して、大学を開放しようという動きが、日本でも大学の大衆化に伴って顕著になり、「ユニバーサル・アクセス」段階（マーチン・トロウ）に至って日常的なものになった。大学開放には「学生となる教育機会の開放」「施設開放」「大学情報公開」など、さまざまな形態があるが、ここで検討したいのは「公開講座による学習内容の開放」についてである（今津 2001）。

大学の公開講座のほとんどは地域の成人市民に開くものであり、生涯学習熱ともあいまって、カルチャーセンターほどは経費がかからない身近な教養講座として人気を呼び、地域の暮らしのなかにすっかり定着している。それでは、青少年に対する開放についてはどうなっているのだろうか。

大学評価・学位授与機構（2002）による第三者評価が2000年度より開始され、国立大学98および大学共同利用機関14計112機関を対象にした最初の全学評価テーマは「教育サービス面における社会貢献」であった。評価対象を厳密に言えば、「大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち、

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程学生

*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科修士課程学生

正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について、全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動」である。著者の一人である今津は1年半に及ぶその評価作業に加わった。各大学等のなかには、数はそれほど多くないが小・中・高校生を対象にした大学公開の取り組みが含まれていて、いずれも高く評価された。それらのうち三つの事例を抜き出そう。

a) 室蘭工業大学「小・中・高校生を対象にした理工系分野の啓発事業として次の企画を実施した。小・中学生とその保護者が『科学と友達になろう』というテーマのもとにものづくりや科学実験に親しむ。中・高校生が「ロボット・サッカー・コンテスト」に参加、ロボットの製作指導、コンテストなどをおこなう。高校生と高校教員等にオープン・キャンパスで模擬講義をおこなうほか、北海道各地の高校に出向いて講義もおこなう。」

b) 群馬大学「青少年を対象とする教育サービスを実施している。小・中学生には『医学研究者・医師・看護師体験コース』があり、また『フレンドシップ事業』のなかでは東毛地区の小学6年生のクラスでポルトガル語のみの環境でブラジル料理を作り、試食するまでの体験学習を展開。高校生に対しては『出前授業』や『新ミレニアム脳科学』を、あるいは県内の看護専門学校生には解剖実習の見学と講義をおこなっている。」

c) 熊本大学「大学側から高校等に出向いて大学の教育研究について説明するとともに、模擬授業をおこなっている。また、中・高校生を対象に大学の施設や設備を公開し、展示をおこなうなど、授業や体験学習の機会を提供し、大学の教育研究に対する関心を喚起している。」

以上、三つの取り組み事例を見ただけでも、青少年への大学開放の具体的な形態にはいくつか特徴のあることが分かる。

- ① 講義形態だけでなく、実験や実習（工学系・医学系など）を取り入れた体験学習を重視していること。
- ② 高校生だけでなく、小・中学生も対象とし、学校段階別の公開プログラムを工夫していること。
- ③ 大学を開放して青少年に来てもらうだけでなく、高校へ出かけるというより積極的な開放形態を取っていること。

さて、こうした青少年への大学開放は、「教育サービス面における社会貢献」評価実施から5年ほどの間に全国でさらに加速し、とりわけ「高大連携」は出前（出張）授業やオープンキャンパス、ホームページ上での高校生（受験生）向けの情報提供などの形態をとって、ごく日常的な取り組みになってきた。その背景としては大学側と高校側双方にいくつかの意図が考えられるが、共通する背景は18歳人口の減少であろう。

1) 大学側にとっての意図

- Ⓐ 受験生の減少により、大学・学部・学科の特徴をアピールして少しでも多くの優秀な学生を確保したいこと。
- Ⓑ 大学生の学力低下を踏まえ、大学教育の内容や方法を伝えて、入学後の学習に備えてもらうこと。
- Ⓒ 大学の教育・研究を広報することにより、個々の受験生の適切な進路選択を促し、入学後の大学教育への適応を円滑にすること。

- ④ 出前授業やオープンキャンパスの各種デモンストレーションを通じて、現代の高校生の特徴を理解し、大学教育に役立たせること。
- ⑤ 大学法人化により、国立大学は各大学が自助努力によりそれぞれの特徴を発揮しつつ大学経営をしなければならなくなったこと。

2) 高校側にとっての意図

- ① 18歳人口の減少による受験競争の緩和は、受験への動機付けの質的転換を要請している。すなわち、大学受験は説明しなくても当然という性格の道筋ではなくなった。そこで、大学の教育・研究の一端を実地に見聞することにより、大学進学への動機付けをはかる。
- ② 大学情報を実地に得ることにより、大学や学部等の進路選択に役立たせる。
- ③ 大学教員による講座を高校教育カリキュラムに組み込む。
- ④ 高校教員も大学の教育・研究の先端を知ることによって高校教育の参考にする。

いずれにしても、従来の高・大の関係は、大学入試という一点だけで形式的に“接触”していたにすぎなかった。毎年多くの受験生が自然に集まってくれるから、教育・研究を実地に伝えることなど考えることもなく、高校生に大学を開放していなかった大学。そして偏差値のみを手がかりに志望大学・学部を受験志望者を割り振りって進学指導し、あくまで進学率が教育成果だと判断し、何のために進学するのか、進学して何をするのか、入学後の大学教育適応のことなど考えたこともなかった高校。両者は今、その取り組み方を大きく変え、単なる形式的“接触”関係から教育・研究の内容面によって実質的に深い関係を取り結ぶ“相互連携”関係の段階へと到達するに至った。18歳人口減少は、いわゆる“生き残り”戦略を大学や高校に取らせることになっただけでなく、「高大連携」を高校・大学双方に要請したという点で、高校から大学へと移行する時期の教育の「質」の向上を図らせていると言ってよいだろう。

名古屋大学が主導する有名な取り組みに年1回開催の「数学コンクール」がある。受験数学のイメージを中・高校生が払拭して、本来の数学の醍醐味を味わえるように出題を工夫し、同時に数学的才能を持つ人材を発掘したいという意図も併せ持ったこの事業は、大学開放の意図で言えば、1) 大学側にとっての意図③④⑤の特徴を備えているように思われる。

(2) 「学びの杜」と「サマースクール」

さて、「学びの杜—新しい自分との出会い—」は名古屋大学教育学部附属中・高等学校（以下、「附属学校」と略記）が主催して大学研究者を招き、2002年度から始まった課外の特別授業である。この授業は「中学・高校で学習する領域や授業内容にとらわれることなく、様々な学びの場を授業外に設定することで、生徒たちが自分の中にある新たな自分の可能性を見つけてほしいという願いをこめた講座」である。自由参加で、保護者も加わり、毎回20～30名の出席があった。多元数理科学研究科の梅村浩教授（「円周率 π の話」）や理学研究科の福井康雄教授（「宇宙と太陽系のはじまり」）などそうそうたる講師陣による全9回を終えた後であらためてこの講座の役割を検討すると、以下の七点が挙げられる（名古屋大学教育学部附属中・高等学校編著 2003、第4章「大学連携『学びの杜』講座」）。

- ① 生徒の深く広く学びたいという知的好奇心を多方面から育て、生徒の可能性を広げる。

- ② 特定の領域に興味・関心が強い生徒の力をのばす。
- ③ 既存教科の枠にとらわれない授業を通して、広い視野を育て教養の裾野を広げる。
- ④ 最先端の技術や現在起きている課題についてリアルタイムで学ぶことによって現在学習していることがどのように発展していくかという先への展望を示す。
- ⑤ 身近な内容を専門的に学ぶことから、日常生活における知的センサーの感度を高める。
- ⑥ 自分の興味のあることを学び続けるために、現在どのような学習が必要であるかを知る機会とする。
- ⑦ 大学での学習活動を理解することにより、自分にあった進路を真剣に考える機会とする。さらに大学での学びの基盤をつくる。

この「学びの杜」は2) 高校側にとっての意図⑧⑨といえよう。

一方、「サマースクール」は科学研究費補助金（萌芽研究）「高大接続の改善を目指す自薦型AO入試の基礎的開発研究」（平成14～15年度）に基づいて計画され、名古屋大学教育学部が主催して2002年8月に「名古屋大学教育学部 高校生のためのサマースクール」として実施された夏季特別授業である。このプロジェクトは実践研究の特徴をもち、教育学部の教育・研究活動の一端を実地に高校生に体験してもらうと同時にAO入試に関連する諸資料を収集するのが主要な目的であった。

1) 大学側にとっての意図でいえば、①～⑤すべてが該当する。

開設の趣旨は第一に「教育学部・教育発達科学研究科の理念と使命とこれまでの活動、学部の教育プログラムと内容、教官の研究内容を高校生に多様なルートを通して広報すること」で、サマースクールは「その情報の一部を提供する場」である。第二に「志の高さと優れた資質を判断する資料の収集」である。第三にこれまでの単純なペーパー入試ではなく、入試が「新しい体験を得られる」ような「選抜方法の開発に伴う実施体制」の検討である（的場・他 2003）。

募集については名古屋大学教育学部附属高校（以下、「附属高校」と略記）だけでなく、近隣の高校にも広報し、高校2年生に呼びかけたところ、44名が参加した。サマースクールは四コースから成り、希望動機に基づき受講生を配分した。第1コース「外国の学校について知ろう 学校を手がかりとした国際理解」（11名）、第2コース「学ぶ立場から教える立場へ 人間形成の場としての授業」（12名）、第3コース「観るということ—心理学的なものの見方」（11名）、第4コース「高校生を対象とした『人の行動を考える』視点を養う教育実践」（10名）である。ワークショップを取り入れ、大学院生が全面的に指導に取り組み、朝10：00から午後4：00までの三日間という集中で、夏休み中に作成するレポートも課せられるという重厚な形態である。

（3）「学びの杜・サマースクール」

サマースクールが3年続いたあと、2005年度には、文部科学省より特別教育研究経費を得て、大学教員と附属学校教員による高大連携事業として「学びの杜・学術コース」が開催された。それには四つの特色がある（速水・他 2006）。

- ① 系統的なテーマ性を持った連続講座を用意する。
- ② 名古屋大学のリソースを最大限活用し、学習を確実に深化させる。
- ③ 自分の将来へのビジョンを確実に広げる。

④ 附属学校の単位として認める。

この連続講座は「心理学探求講座」「教育学探求講座」「法学探求講座」「理学探求講座」という四講座が主として土曜日の10時～12時に附属学校を主会場にしてそれぞれ10回開催されるという充実したもので、附属学校の単位として認められた。この単位化によって、名古屋大学と附属学校の連携は本格的なものへと移行したといえる。つまり大学公開が高校生への高校教育単位付与という形の高大連携の教育プログラムを作り出したのである。1) 大学側にとっての意図でいえば、①③④に力点がある。2) 高校側にとっての意図でいえば、①②③である。しかも、この連続講座については事前・事後調査が実施され、「学ぶ意欲」や「進路」「職業」などについて講座ごとに調査され、高大連携の基礎資料を得ることができた。

そして2006年度は中等教育研究センターが中心になって高大連携をさらに拡大させ、「学びの杜 学術探求講座」が開設された。毎週土曜日開講の「数学探求講座」(多元数理研究科)、「理学探求講座」(理学研究科)、「生命科学探求講座」(名古屋博物館)、「法学探求講座」(法学部)と、夏期集中の「人間発達科学探求講座」(教育発達科学研究科)である。

そのうち「人間発達科学探求講座(サマースクール)」についていえば、対象はこれまでと同様、附属高校と近隣の高校生いずれも2年生で、計四講座が実施された。第一講座「生涯にわたって人が人として生きるために」、第二講座「人の学ぶ楽しさと意味の探求」、第三講座「異文化との出会いと自己探求のドラマ」、第四講座「人間の心と行動を解き明かす」、第五講座「成長発達する人間とその援助」であり、教育学部の五大講座に対応した講座編成で、教育学部の教育・研究内容紹介が中心であるが、全体としての目的は大学側・高校側双方とも2005年度と変わらない。

このように、附属学校と名古屋大学にとって2002年度から始まった高大連携は5年間の実績を積み上げ、実践調査研究としての成果も生み出してきている。大学開放の観点から今後の課題を列挙すると次の三点である。

① 開放講座名について。「学びの杜」は附属学校が名づけたもので、「サマースクール」は教育学部がAO入試開発のための実験として開講した講座に名づけたものである。今後は基本的に「学びの杜学術探求講座」とし、手短かに「学びの杜探求講座」あるいは「学びの杜講座」と呼称してもよいだろう。夏期集中の形態をとる場合は「学びの杜・サマースクール講座」とすればよい。

② 企画・立案・運営の組織について。附属学校と教育学部を核とする名古屋大学が合同して開放講座を実施していく方法が確立したので、組織的には中等教育研究センターが企画・立案・運営にあたるのがもっとも適切である。

③ 調査研究活動について。研究費がついたので始められた実践調査研究であったが、今日の高校生の関心・進路意識や大学の授業についての興味・意見などは引き続き調査していく必要がある。この調査研究の運営も中等教育研究センターの重要な任務であると考えられる。そして調査結果については、附属学校教員と教育学部教員との研究討議の会合が持たれるとよい。「学びの杜・サマースクール講座」は、何と云っても名古屋大学と附属学校の高大連携だからであり、附属学校の存置理由を明確にする一環だからである。

さて、2006年「人間発達科学探求講座(サマースクール)」において、第三講座に属する私たちは「異文化との出会いと自己探求のドラマ」に関する講座を企画した。それが「世界の民族・日本

の民族」である。私たちは8月3日（木）に附属高校2年生5人と他校の2年生5人の計10人を対象に半日間、小規模の講座をおこなった。以下はその報告である。

1. 本講座の目的

まず、「世界の民族・日本民族」というテーマを設定した趣旨は大きく分けて次の二つである。

A. 「国際社会文化」コースを紹介する。教育学部といえば心理学という多くの高校生の囚われから脱してもらうために、心理学以外にもさまざまな専攻分野があることについて情報提供すること。第三講座の学部教育コースである「国際社会文化」を体得できるようなテーマを提供し、そのテーマを扱う分野が魅力あることを感じさせ、進路選択の枠を広げさせること。

B. 国際とか異文化に関して高校の授業では触れられていない内容を提供する。すでに中学や高校の「総合的学習」のなかで、「環境」や「生命」などと並んで、「異文化理解」や「国際交流」に関する学習はすっかり定着している。附属学校でも「総合人間科」や新教科「国際コミュニケーション学」においてすでに関連した独自の学習が展開されている。そこで、それらの内容を超えていっそう掘り下げるような新たな内容を提起する学習機会とする。大学2年生程度の授業内容を目指す。その新たな内容をさらに細かく説明すると以下の三つである。

① 高校段階では一国のなかの「民族」に焦点を合せた学習はまだあまりおこなわれていない。したがって「人種」・「民族」・「国籍」を明確に区別する知識や感覚がきわめて乏しいというのが高校生の特徴である。この特徴は日本の大人にも共通する。ところが、「出入国管理及び難民認定法」（いわゆる「入管法」）が改定された1990年以降、地域社会に多くの外国人が居住するようになった。いわゆる「ニューカマー」と呼ばれるようになった人々である。1980年代後半から急増した新来外国人が「ニューカマー」だとすると、戦前・戦中から日本に定住している在日韓国・朝鮮人を中心として1980年代半ばまでに来日して在住している旧来外国人は「オールドカマー」と名づけられて区別されるようになった。両者には国籍や人口、居住地域などさまざまな特徴的違いがあるが、「オールドカマー」「ニューカマー」の名称は来日時期で区切った便宜的なものである（今津 2003）。

そして、1990年代以降に「多文化共生」がスローガンとなってくるにつれて日本社会の民族構成が身近な問題になってきた。しかし、敗戦によって植民地をすべて失った戦後日本が、自らの立脚点を「純粹こそ国の良さ」という暗黙の意味を込めて唱えるようになった「単一民族」言説のために、この身近な問題は多くの日本人の意識に浮かび上がるには依然として至っていない。この言説は20世紀初頭にリップマン（1987）が社会心理学の新たな概念として提起した「ステレオタイプ」を形づくっている。すなわち彼によれば「われわれはたいいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る」（111頁）のである。では「単一民族」という「定義」はいかなるものか。今津（1993）は以下のように述べた。

「日本は単一民族から成り立っていて、水田稲作農耕に基づく文化的同質性をもつという見方は、これまで専門の研究者にとってさえ自明の前提とされてきた。ましてや大多数の日本人は、みずからを単一民族で同一の文化を保持する国民として信じて疑わなかったし、同一で単一であることが文化的に優れている、と暗黙のうちに思い込んできたのである。…日本人にとって、『人種』『民族』『国民』というカテゴリーを弁別することがむずかしいのは、日本が

世界の多民族社会と比べて、民族的同質性が高いからということだけではなくて、一民族で一元的文化によって構成されているという『定義』が身体感覚化されるほど浸透しきっているからであろう。そして、世界に対する認識も『国内』と『国外』に簡単に大別してしまい、国内の文化的異質性や国外の人種民族構成の多様性には着目しないで、国内も国外もそれぞれが一樣であると認識してしまう。同質で一樣な『ウチ』と、この『ウチ』を中心とした場合に異質だと判断されるものは一括して『ソト』と見なしてしまうような発想も、そうした『定義』に由来しているといつてよいだろう。」(161～162頁)。

しかし、こうした「定義」のもとでは隣人としての外国人に対する「他者認識」が不十分に止まるだけでなく、「多文化共生」が内実を伴った社会の仕組みとして実現することは難しい。

②「他者認識」を広げ深めることは、同時に「自己認識」を再検討することでもある。「外人(エトランジェ)というものを考えていくと、《我々》の観念自体があやしくなってくる」と言ったのはクリステヴァ(1990、3頁)であった。他者認識と自己認識についても今津(1998)は次のように述べている。

「最近の日本の国際化と、その結果生じてくるさまざまな文化摩擦の経験を通じて、わが国では他者認識としての異文化理解への取り組みが少しずつ高まると同時に、日本社会に対する自己認識も再検討されるようになってきた。すなわち、日本社会は単一民族であり、同質であり、それは島国の閉鎖性ゆえである、という従来からの自明として疑うことのなかった一般的な理解ははたして正しいか、という問いかけである。それは、国際社会のなかで日本が重要な位置を占めるようになったいま、日本人とは何かというみずからのアイデンティティをあらためてさぐりはじめたことでもあった。」(91～92頁)

異文化を知ろうとする取り組みは「国際交流」イベントなどを通して学校ではすっかりお馴染みである。しかし、他者認識は自己認識に至らなければ本当に文化を理解したことにはならない。学校での「国際交流」という形態を中心にした段階は終わった。地域社会の「他者認識と自己認識」という次の段階へと進むべきことが要請されている(図1参照)。本講座はこの要請に応える実験的試みである。

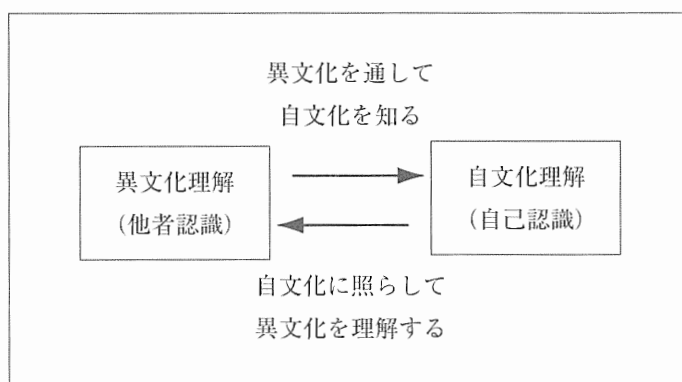


図1 異文化理解とは何か

表1〔OHPシート1〕 講座の指導者とTA

ティーチング・アシスタント (TA) :	
名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教育科学専攻・大学院生-留学生	
劉 勇 (リュウ ユウ).....	中国・天津出身 漢民族
童 潔 (トン ジェ).....	中国・浙江省出身 漢民族
賽漢卓娜 (サイハン ジュナ).....	中国・内モンゴル自治区出身 (北京生まれ) モンゴル民族
中村・五島パトリシア (ナカムラ パトリシア).....	ペルー・リマ出身 日系ペルー人三世
指導者：名古屋大学教育学部・大学院教育発達科学研究科・教授	
今津孝次郎 (イマツ コウジロウ).....	日本・徳島出身 大和民族

③ 幸い、名古屋大学キャンパスには世界の約75ヶ国から約1,200人の留学生が来日していて、異文化を体現する人的資源が豊富に存在する。この人的存在と高校生が触れ合うなかで、「他者認識と自己認識」を推し進めるための基本的な知識や思考方法枠組みを提供し、知的刺激を与えながら異文化の「ステレオタイプ」から自由になることのできる能力を磨くことがこの講座の目的である。具体的には、教育発達科学研究科に在籍する大学院留学生がティーチングアシスタント (TA) として諸資料をもとに身近な話題を提供し、それをもとに議論を展開する。「人種」・「民族」・「国籍」を明確に区別し、単なる「国際交流」や「異文化理解」を超えて、理想的に語られるだけの表面的な「多文化共生」をいっそう深く掘り下げるために、異文化と自文化に関する認識方法を学ぶ。最初に講座スタッフの自己紹介としてOHPシート1 (表1) を掲げた。本講座の場合、TAは指導者の補助役というよりも、指導者以上に重要な位置を占めており、講座のテーマを体現するような重要な存在である。

2. 本講座の方法的特徴

(1) 参加型学習

一方的講義ではなく、「参加型学習」を目指した。その理由としては、第一に小規模の受講生で、しかも講座時間が長いこと。第二に異文化のステレオタイプから自由になるには、多方面から問いを出して、深く思考することが必要であること。第三にTAとしての留学生と質疑応答することがその思考を鼓舞すると考えられること、である。具体的には以下のような参加方法をとった。

①質問票を配布して、受講生が答える形態を最初から最後まで続けること。表2がその質問票であり、講座の流れのなかで導入、展開、まとめの各段階の節目を形成するものである。

②TAとして参加する留学生が自らの文化を語り、「民族」の性格を実際に浮き上がらせる。その語りを単に「異文化理解」として受け止めるのではなく、生徒自身が自文化を認識する際の鏡とする。TAの発表に関して質疑応答をおこなう。

③最後の段階では二つの班それぞれで、多文化化する地域社会をどう理解し、多文化社会の生活にとって何を考えていかねばならないか、について班討議をし、最終的に全体で総括討論をおこなう。各自が考える今後の課題を明らかにする。TAは各班に分かれて加わり、質問に答えたり助言

をおこなう。班については、附属学校生と他校生とがちょうど半々なので、受講生名簿に従い、あらかじめ両者を相互に組み合わせた座席表を示し、講座の最初から口の字型の席についてもらって二つの班を構成した。自由に座ってもらうと、附属学校生徒と他校生徒が分かれて座ることになるだろうと予測したからである。

④ 本講座はTAの大学院留学生にとっての研究活動にも繋がるものである。高大連携は、大学教員だけでなく学部生や大学院生・留学生の存在も活かしながら、さまざまな形態を開発しつつ自由に展開すべきである。

表2 質問票（受講生用）

Q1	日本の国技である大相撲の外国人力士は現在何人いるでしょうか？ ①20人 ②45人 ③60人
Q2	世界中で、「人種」「民族」「国」の数はそれぞれいくらでしょうか？ ・「人種」…………… () ・「民族」…………… () ・「国」…………… ()
Q3	日本で居住する民族の数はいくらでしょうか？ ・太平洋戦争以前…………… () ・太平洋戦争終結以後…………… () ・1990年以後…………… ()
Q4	日本で居住する外国人・異民族の方々が多くなってきました。そういう現象を「『多文化』化」といいます。では、「多文化」化する地域社会で、私たちは新たにどんなことを考えていかないといけないでしょうか。 思いつくことで良いですから、自由にあげてください。
<p>-----</p> <p>【参考書】 王 柯『多民族国家 中国』岩波新書、2005年 藤本強『もう二つの日本文化－北海道と南島の文化－』東京大学出版会、1988年</p>	

(2) 時間配分と学習内容

プログラムとして与えられた時間は、13：30～16：00の計2時間30分で、高校生にとっては長丁場である。高校での通常の授業でいえば3時限分をぶっ通しでおこなうことになり、形態に変化を持たせないと持続できないであろう。そこで、大きく三場面に分けて、学習時間と学習内容の柱立てを構成した。第Ⅰ部が約60分、約10分の休憩を挟んで第Ⅱ部が約30分、第Ⅲ部が計約40分という計画である。第Ⅰ部と第Ⅱ部は指導者およびTAの話が中心であるが、第Ⅲ部はTAも含めた班討議である。

- 第Ⅰ部：世界の民族について、中国とパルーを中心にして学ぶ。
- 第Ⅱ部：日本社会の民族構成について学ぶ。特にニューカマーについての知識を得る。
- 第Ⅲ部：以上二つに関する知識と視点を身につけて、多文化化する日本社会で生活するうえで考えるべきことに気づくために、生徒自身による相互討論をおこない、問題関心を高める。

以上の柱立てにしたがって作成した指導案が表3である。

表3 指導過程（指導者・TA用）

時間	段階	指導者	T A
13:30 5分 13:35	導入	発問：大相撲の外国人力士数 発問：人種・民族・国の数	
13:35 60分 14:35	展開Ⅰ		中国の民族・言語・地域・衣装など文化の紹介と質疑応答
14:35 10分 14:45	(休憩)		
14:45 5分 14:50 30分 15:20	展開Ⅱ	発問：日本の民族数 日本の民族構成の説明	ペルーの民族・言語・地域・音楽など文化の紹介と質疑応答
15:20 30分 15:50	展開Ⅲ	発問：多文化化する日本について 考えねばならぬこと	二つの班にそれぞれ入って、討議の助言など
15:50 10分 16:00	まとめ	各班からの発表をまとめる論点の列挙	講座の所感を述べる

(3) 準備する教材等

「世界の民族・日本の民族」に関する情報空間を教室に作り上げた。この教室空間は、その情報環境におかれた高校生がいやがおうでもテーマについて向き合わざるをえなくなる装置である。教材等はA～Cの三種類で合計10点である。

A 教室内使用教材

- ① 世界地図（中国—日本を含む—・南北アメリカ）教室に掲示
- ② CDプレーヤー（TA 賽漢卓娜による中国モンゴル民族紹介の音楽教材）
- ③ プロジェクター+パソコン（TA 中村・五島パトリシア作成のパワーポイント資料—ペルーの民族・文化）
- ④ OHP（指導者今津の講義用として各種資料提示）〔表1・4・5〕
- ⑤ 民族衣装（漢民族・モンゴル民族・ペルー人・大和民族を示す衣装など、TAおよび指導者が身につける）

B 受講生配布教材

- ⑥ 質問票〔表2〕
- ⑦ 中国の民族分布図（王 2005、「はじめに」所収の地図をコピー）〔付属資料1〕

- ⑧ スペイン語のあいさつ表現〔付属資料2〕
- ⑨ 日本（愛知県）の外国人登録者統計図表（ネット資料「愛知県の外国人登録者」によりカラーコピー）〔付属資料3〕
- C 回覧教材
- ⑩ 中国民族切手（ネット資料「中国の民族—中華人民共和国成立50周年記念56民族切手—」1999年10月1日発行、によりカラーコピー。各民族の衣装や踊り、楽器が巧みに表現されている）〔付属資料4〕

3. 多文化における国籍と民族（指導者＝今津孝次郎）

（1）外国籍と民族

外国人あるいは異民族の人たちがどれだけ私たちの身近なところに存在するかについて関心を向けるための「導入」として「国技としての大相撲に外国人力士が何人いるか？」というクイズを出した（表2-Q1）。これはネットですぐに検索できるデータである。10人の高校生に挙手で尋ねたところ、もっとも多かったのは「45人」であった。正解の「60人」を告げると、驚きの表情が見られた。「国技」が「国際技」になっているほど外国人が多いことを再認識したうえで、さらに一歩進めて「人種」・「民族」・「国」の数を聞いた（表2-Q2）。「人種」については、すぐに黄色・白色・黒色の三つであると正解を得た（形質人類学的には五つという説もある）。「国」についても「約200」という答えに近い反応が出された。問題は「民族」である。

「民族」の識別は「言語」であることを確認したうえで、世界でどれくらいの言語＝民族があるかと問うたところ、100とか500とか少ない数しか答えが返ってこない。「約3,000」と正解を言う（文字を持たない言語もあり、絶滅しかかっている言語もあって精確な調査は困難であり、5,000という説もある）、高校生は思ってもみないほどの数だという戸惑った表情である。「民族」についての日頃の関心の低さ、知識の乏しさが示されたわけだが、それは高校生だけでなく日本人全体の意識状況でもあろう。「単一民族」言説や実際に日本社会が太平洋戦争後50年近くにわたって、実際に単一民族にきわめて近い民族構成であったから「民族」への意識の低さは無理からぬところがある。そこで「では、国家の数200と民族の数3,000とを見比べると何が言えるか？」と問いかけると、「一国のなかに多くの民族がいる」との答えがすぐに返ってきた。たしかに、単純に割り算すれば、一国のなかに15の民族が存在する計算になる。

民族とは何かを実地に感じてもらうために、中国からの大学院留学生2人に中国の民族について語ってもらった。一人は漢民族であり、もう一人はモンゴル民族である。中国は56の民族から成る多民族国家であるということは、アメリカやオーストラリアなどと比べてあまり意識されてはいない。56民族のうち漢民族人口が総人口の約92%を占め、55の少数民族はわずか約8%に過ぎないという割合のためでもあろう。しかし、中国では8%といっても1億人を超えて日本の総人口に近づくほどの数であり、実態は「少数民族」という言葉から受けるイメージとは異なる。TA二人の話を資料的にも裏付けるために、配布資料に中国の民族地図（付属資料1）を挟むとともに、中国政府が建国50周年記念として56民族の模様をそれぞれ形どった記念切手一覧をカラーコピーして席上回覧した（付属資料4）。各民族の衣装や踊り、音楽が民族ごとの56枚の小さな切手に巧みに表現さ

れている。こうした記念切手を中国政府が発行するにはいかなる背景があるかを知っておくことは教材研究として必要なことであろう。

王（2005）は、日本人が抱いている一般的な中国観を崩してしまうような事実について次のように書いている。

「中国は多民族国家だから、日本とはちがってかならず『民族』を書かされた。中国には漢族のほかに55の『少数民族』がいる。そのため、中国の戸籍登録や公的機関が発行するさまざまな証明書と免許書には、かならず『民族』という欄がある。ところが、個人の『民族籍』は、ある意味で人為的なものである。たとえば、異なる民族出身の夫婦間に生まれた子供は、両親のどちらを選んでも自由であり、後に変更することも認められている。」（i 頁）

「日本語で『中国語』と言うのは、中国語では『漢語』と言い、『中国語』とは言わない。つまり、『漢語』は中国の言語であり、少数民族のほとんどが独自の母語をもつため、『漢語』はあらゆる中国人の母語—『中国語』—にはならない。」（24頁）

また、可見・他（1998）は中国において少数民族が政治において占める位置の重要性について、次のように述べている。

「少数民族の居住地を地政学的に読みかえてみると、中国の国境線がつかなる国防上の要衝に当たるとともに、中央が権力を十分及ぼしかねる辺境であるだけに、反体制的運動の拠点となりやすい公安上の問題が潜在する。また資源論の立場からいうと、少数民族の居住区は木材の蓄積量、水力資源、石油・石炭をはじめ各種鉱物資源の埋蔵量が豊富であって、いずれも漢族居住区のそれを凌ぐのである。この二点だけでも、強力で安定した近代国家の建設を達成する上で、中国は少数民族を埒外に置くことができないのである。」（4～5頁）

以上のように、56から成る多民族国家であるということを踏まえないと中国を理解することはできない。日本で言う「中国語」は中国では「漢語」と言う事実はほとんどの日本人にとって初耳であるが、たとえ漢族が大多数を占めるにしても、中国が55の少数民族をきわめて丁寧に扱っていることが分かる。

（2）日本社会の民族的構成

さて、高校生に表2-Q1～2を質問する「導入」（5分）を踏まえ、TAの中国人留学生二人が漢族とモンゴル族の立場から中国の民族について紹介する「展開Ⅰ」（60分）で前半が終わる。休憩の後で「展開Ⅱ」に入るが、いよいよ日本の民族構成へ目を向けていく段階である。まず、Q3「日本で居住する民族の数は？」を質問する。高校生からは「アイヌ」とか「朝鮮」というつぶやきが聞こえるが、数そのものは答えが出てこない。そこで2枚のOHP（表4～5）を示しながら説明する。南北に長い列島である日本は、いくつかの異なった基礎的な文化から成り立っているという見方は、歴史学や人類学、民族学、民俗学のおおよその定説である。

先住民族の「アイヌ」の存在は法律でも規定されている通りである（「北海道旧土人保護法」〔1899年〕を廃止した後で成立した新法「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」〔1997年〕）。藤本（1988）に従い、それが「北の文化」とするならば他方「南の文化」が存在する。琉球民族である。かれらの言葉である琉球語の捉え方には二つあって、一つ

は日本語の方言であるという理解であり、もう一つは日本語とは異なる別の言語体系であるという理解である。いずれの理解に立つかによって沖縄の人々が異民族であるかどうかの判断を左右する。ただ、方言といっても本州各地の方言と比べて沖縄の方言の程度を検討すると、やはり別の言語体系に近い。しかも、沖縄の歴史や産業、伝統的な住居、衣装、料理などの文化様式を勘案すれば、本州の一地方というには文化があまりに異なっており、本州に住む人々とは異なる民族だと考えた方が適切であろう。したがって、それは「南の文化」となる。

いうまでもなく、両者の間に挟まれた部分が「中の文化」となり、それが「大和民族」である。アイヌ民族は大和民族を「和人」と呼び、琉球民族は大和民族を「ヤマトンチュウ」と呼んできた。こうした呼び方のなかに両民族の「大和民族」に対する他者認識が表現されている。というわけで、日本は基本的に「アイヌ」「大和」「琉球」の三つの民族から成る。そして、日韓併合（1910年）によって始まった植民地政策そして太平洋（大東亜）戦争政策によって多数の朝鮮民族が日本列島に居住するようになる。戦後は帰国するはずであった朝鮮民族は母国の南北分断、朝鮮戦争などで帰国することができず、やむなく日本に留まる（「オールドカマー」）。よって、戦後日本の民族構成は四つになったと言える。小熊（1998）は「包摂」と「排除」という政治構造の観点からではあるが、日本人のナショナル・アイデンティティを形成する「境界」を論じるなかで、アイヌ・朝鮮・沖縄を取り上げている。

すでに述べたように、1990年の入管法改定以後は、ブラジル・中国・フィリピン・ペルーなど、多くの外国人が来日して就労し、その数は経済不況にも関係なく毎年増加しており、またかれらの定住化傾向が強まっている（「ニューカマー」）。そこで近年の日本の民族構成は少なくとも10以上にはなっていると言えよう。もちろん、外国人登録者が総人口に占める割合は1.57%（2005年末現在）であり、その割合は世界の多民族国家と比較すればまだそれほど高くはない。しかし、総人口の減少と外国人人口の増加によって、将来3.0%を超えるような段階になれば、多文化をめぐる日本社会の状況はさらにいっそう本格的に変化してくるだろう。

次いで、日系ペルー人の大学院留学生に、ペルーの民族と日系社会について紹介してもらった。そして、三人のTAの話をもとに最後の問い表2-Q4を出した。『『多文化』化する地域社会で、私たちは新たにどんなことを考えていけないか？』この問いを中心に、TAも含めた班討議が「展開Ⅲ」の段階である。その様子については第7章「討議」で取り上げたい。次の第4～6章ではTAの話を紹介する。少し専門的過ぎる内容もあるが、高校ではまったく知ることのできない中国やペルーの多民族の様子をまずは感覚的に受け止めてもらえたら、という趣旨である。知識というよりも感性に刺激を与えることが、民族の理解では重要な点であろう。

なお、講座の準備時間が少なかったために、私たちは基本方針の打ち合わせ会を1回持っただけで、指導者のTAへの指示は「母国とその民族構成について説明する」との課題を与えただけであり、内容の相互調整を細かくおこなう余裕はなかった。TA三人による説明は予行練習も無く、当日の本番を迎えた。各自の発表時間は約30分と限られていたので、準備した内容のすべてを話す余裕はなかった。以下は話さなかった部分も含めた発表原稿である。

表4 [OHPシート2] 日本文化の考古学

文化の型	地域	生産	言語	民族
I 北の文化	北海道	採集・交易	アイヌ語	アイヌ民族
II 中の文化	本州・四国・九州	稲作農耕	日本語 (国語)	大和民族
III 南の文化	沖縄・周辺の島々	畑作・交易	琉球語 (方言)	琉球民族

(参考：藤本強『もう二つの日本文化—北海道と南島の文化—』東京大学出版会、1988年)

表5 [OHPシート3] 日本社会の民族的構成

A 基本的民族 ↓	アイヌ民族・大和民族・琉球民族
B 太平洋戦争後 ↓	朝鮮民族(在日韓国・朝鮮人) + 基本的民族 〔オールドカマー〕
C 1990年以後 ↓	ブラジル・中国・フィリピン・ペルー… + オールドカマー + 基本的民族 〔ニューカマー〕

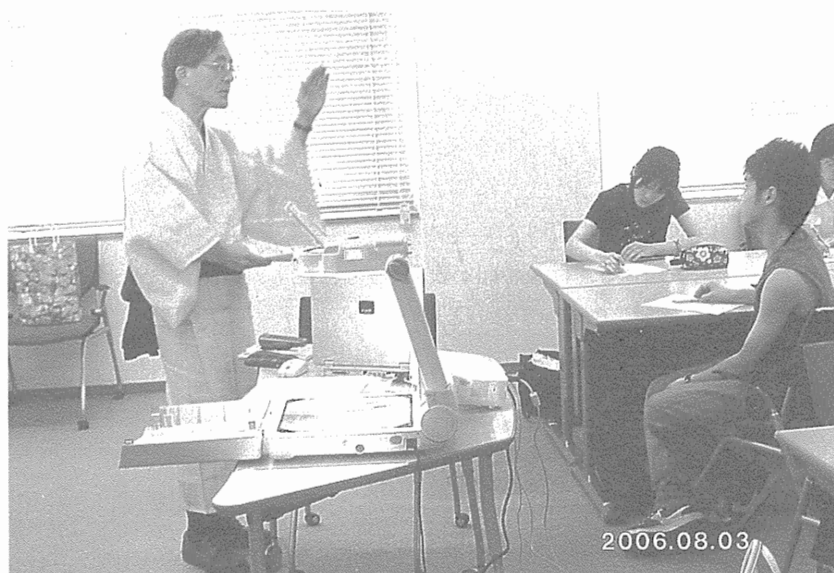


写真1 亡き義父の浴衣を着て日本の民族構成を話す
(撮影：TA=劉 勇 以下同様)

4. 中国南部の少数民族（T A＝童 潔）

（1）チャイナドレス

私（童 潔）は今、チャイナドレスを着ている。このドレスはもともと中国東北地方から出た満州族（回覧資料・民族切手11番）の服装で「チーパオ」（旗袍）と言う。「チー」是北京語の口語で満州族の事を指し、「パオ」は長い衣服の意味である。北方系の騎馬民族である満州族の女性は戦闘時においても狩猟時においても、馬と一体化してより速く走らせるためにも、身体にフィットする衣服を軍服として利用した。そして、素早く馬に乗るために、ヒップの両脇に切り込みを入れた。チーパオの特徴の一つであるスリットである。今でこそ世界中の女性が憧れるチャイナドレスだが、そもそものルーツは単なるワンピースではなく、なんと騎士の乗馬用上着であって、履いた乗馬ズボンの脚をスリットから出す仕掛けであった。満州族は17世紀に漢民族側（回覧資料・民族切手1番）へ侵攻し、やがて中国全土を支配するに至り、かれらの文化や習慣が大きく普及することになった。デザインが“ゆったり”から“びったり”に変わったのもこの時期であり、襟も耳の近くまで来るほど高くなったり、逆に低くなったりと多様化した。このように、チャイナドレスには中国の民族の歴史が刻まれている。

現代では、チャイナドレスは礼服として着用されることが多くなり、ウェディングドレスとしてのチャイナドレスから、イベント、パーティに出席する際の正装礼服、おしゃれな普段着として着用する場合も多くなっている。私のこのドレスは大学卒業式で着たものである。チーパオの生地は絹、綿、麻などがあり、織物としては紗、ベルベット、緞子（どんす）、ちりめん、錦などと多くの素材が用いられる。図柄も一般に縁起の良い文字や花、動物などを図案化したものが用いられる。文字では「寿」、「福」、「喜」など。花では「梅」、「牡丹」など。動物では「龍」、「鳳凰」、「孔雀」、「蝶」など。映画「花様年華」の主演女優である張曼玉（マギー・チャン）は、映画の中で異なったデザインのチーパオを20着ほど身に付けたことで有名になり、チャイナドレスは「東洋女性の素敵な服装」と世界中が注視した。今では、クリスチャン・ディオール、ピエール・カルダンなどの有名ブランドからもチーパオをモチーフにしたデザインが発表されているほどである。

（2）南部の少数民族

さて、私の故郷は揚子江三角洲の南部にある浙江省の省都「杭州」である。人口は約400万、上海まで車でおよそ2時間という場所にあり、経済的に豊かな地域である。温かく湿潤で四季の区別が明確な杭州が都になったのは南宋時代（960～1279年）で、そのときの都市発展は世界一であり、440種類もの商業があり、交易が盛んであった。杭州市が成立したのは1927年、対外貿易で栄えるとともにレストラン・茶館・旅館などのサービス業が繁栄し、「地上の楽園」と呼ばれてきた。

それでは故郷に近い中国南部の少数民族のうち三つについて紹介したい。

① チワン（壮）族〔回覧資料・民族切手8番〕

人口は約1,550万人。中国の少数民族の中で人口の最も多い民族である。主に広西壮族自治区、雲南省の文山壮族苗族自治州に居住し、一部が広東省、湖南省、貴州省、四川省などに散在している。言語は漢・チベット語系の壮・侗語族壮・僚語分支に属するチワン語を使用し、南北二大方言に分

かれています。南宋の時代に漢字をもとに独自の文字がつけられたが、標準にはならなかった。1955年にはローマ字をもとにしたチワン語の文字が作られたが、現在チワン族はほとんどが漢語（中国語）を使用している。

チワン族は広東・広西の地の原住民族として長い歴史を持っている。1958年3月には、広西チワン族自治区が発足した。中国の古代青銅文化の逸品である「銅鼓」は、広西チワン族自治区で500余りが発掘されており、現在でも祝日やイベントの際には使用されている。チワン族は歌が好きで、広西チワン族自治区は“歌の海”と言われているほどである。主たる産業は米やトウモロコシの栽培を中心とした農業である。また、“壮錦”はチワン族の伝統的な手工芸品で、海外にも名を知られるほどの特産品である。

② イ（彝）族〔回覧資料・民族切手7番〕

人口は約657万人でチベット系。主に雲南省、四川省、貴州省、広西チワン族自治区に居住。言語は漢・チベット語系のチベット・ミャンマー語族イ語分支に属するイ族語を使用。六種類の方言があり、イ文字と呼ばれる表音文字を持っている。イ族では黒は人間世界の色、白は精神世界の色とされ、衣類をはじめ日常の生活用品まですべて黒で揃える。イ族はプライドが高く、人情、信義と義理を重んじ、客を大切にす礼儀正しい民族特性を備える。来客があると、さっと駆けつけて出迎えの歌を歌いながら酒を勧め、囲炉裏端の上座に座らせる。最も盛んな祝日はたいまつ祭り、旧暦6月24～25日におこなわれる。厄除けと豊作を祈願する祭りで、闘牛あり、ファイヤーあり、レスリングありの2日間の祭りでは、着飾った若い男女のフォークダンスもあり、一種のお見合いの場ともなっている。

③ タイ（傣）族〔回覧資料・民族切手18番〕

人口は約12万人でタイ系。主に雲南省、西双版纳タイ族自治州と徳宏タイ族ジンポー族自治州に居住。言語は漢・チベット語系チワン・トン語派チワン・タイ語族に属するタイ族の言葉を使用し、徳宏方言と西双版纳方言がある。文字は表音文字で、インドのパーリ文字をもとに作られた傣仿文字、傣那文字、傣绷文字、傣端文字の四種類があって、それぞれ書体が異なる。タイ族の音楽、舞踊、民謡、民間説話などは周辺民族にも広く影響を与えてきた。タイ族の祝日は水掛祭りが最も盛大な祭りで、タイ暦の新年に行われ、3日から4日間を通して、人々は互いに盆にためた水を持って町に出て、「水、水、水」という掛け声とともに水を掛け合い、災を取り除いたり、祝福し合う。

以上が三つの少数民族の概要であるが、TA三人の発表が終わった後、二つの班に分かれておこなった討議のなかで、最初に出された私（童 潔）への個別質問のやりとりは以下のようなものであった。高校生の認識枠組みではやはり「民族」という視点が馴染みにくく、まずは日本対中国という「国家」の枠組みでの質問が先行した。

〔問〕日本に来た時、どんなことでびっくりしましたか。

〈答〉物価が非常に高いことです。

〔問〕日本の食べ物は食べられますか。

〈答〉最初は刺身や生ものを食べられなかったのですが、日本に長くいるうちに、食生活もだんだん慣れてきて、今は日本料理が大好きです。

〔問〕 日本に対するイメージが来る前と来た後で違いますか。

〔答〕 来る前に日本に関する情報はほとんど中国のメディアから得たもので、それには正しい情報もありましたが、古いものや間違っただけのものもありました。やはり、自分の目で見た日本が本当の日本だと思います。

〔問〕 日本の文化と中国の文化がぶつかる時はどうしていますか。

〔答〕 まず、今自分が日本にいるので、自分の考え方を日本人の考え方に切り替えるよう意識をしています。日本の風習と慣習を理解して、その上で受け入れるようにします。



写真2 チャイナドレスを着て中国南部の少数民族について話す

5. 中国の少数民族とモンゴル族（T A＝賽漢卓娜）

（1）少数民族

最初にこの音楽を聴いてほしい（CD）。子どもの歌声が入ってかわいいが、何の音楽か分かるだろうか？これは今、中国でヒットしているモンゴル民族の音楽である。

さて、高校生の皆さんは中国についてどんなイメージを持っているだろうか？「人口が多い」、「近いようで遠い存在」、「万里の長城」などすぐにたくさんの答えが出てきそうである。その際に、日本人は中国について「中国人」と一括りにしてしまう傾向がある、と日本に住んでみて感じる。しかし、中国は実に多様性に富んだ国家で、広大な国土をもつ中国のなかにはいろいろな「境界」（boundary）が存在している。たとえば、南方と北方では風土も産業も文化も異なる。そして多くの民族の存在であり、さまざまな民族的背景をもつ人々同士が共に暮らすことは中国人にとってはごく当たり前の風景である。それが日本人には分かりにくいかもしれない。そこで、中国の少数民族について紹介したい。

その前に少し自己紹介をすると、私の名前は賽漢卓娜（サイハンジュナ）と言う。両親は内モンゴル自治区出身で、私自身はモンゴル族でありながら、北京で生まれ育った。学校で漢語（中国語）の教育を受けながら、家の中ではモンゴル語という環境であった。現在は名古屋大学大学院博士課

程院生として、中国と日本の「国際結婚」について調査研究している。

ところで、中国の概況についてはすでに知識があると思うが、国土総面積は日本の約25倍の960万平方キロメートルで、地形の比率は山地33%、高原26%、盆地19%、平原12%、丘陵10%の割合となっているため、人間の生活圏はかなり限られた地域に集中している。また、東西約5,000キロ、南北約5,500キロにわたる中国は、緯度の差が大きいいため、亜寒帯気候区から熱帯気候区まで含まれている。冬は平均気温が30度以上の差があるが、夏には両者の差は5度まで縮まり、どこでも水泳できる気候になる。総人口は13億人であり、世界で最大の人口を抱えている。1978年頃から、政府により「一人っ子政策」が実施され、晩婚が進行している。

さて、中国は56の民族で構成された多民族国家であり、最も人口の多い漢民族は総人口の92%を占める。残り55の少数民族は全人口の8%を占める。少数民族のなかで最も多いのは先ほどもあげられていたチワン（壮）族で、最も少ないのはロツパ（瑯琊）族である。少数民族の分布は、居住地域が広大で617万平方キロメートル、国土面積の64.3%に広がっている。そして山地、森林、高原、牧畜地域に居住しているのが特徴で、また国境周辺の辺境地帯が居住地域であることも特徴である。

言語もさまざまであり、漢・チベット語系、アルタイ語系、南亞語系、インド・ヨーロッパ語系、マライポリネシア語系（オーストロネシア語系）と広がっている。文字も漢文字から、象形文字（ナーシー族東巴文）、音節文字（ナーシー族哥巴文、イー文）、漢文字の変形（方形チワン文、方形トン文、シュイ文、ペー文）と多様である。表音文字としてはサンスクリット文字（チベット文、ダイ文）、アラビア文字（旧ウイグル文、旧カザフ文、ウズベク文、キルギス文、タタール文）、ハングル文字（朝鮮文）、キリル文字（ロシア文）、ラテン文字（チワン文、チンプオ文、ラフ文、ワー文、リースー文、新ウイグル文、新カザフ文、ブイ文、ミャオ文、リー文、ナーシー文トン文、ハニー文）、ウイグル系モンゴル文字（モンゴル文、シボ文、満文）と実に多い。日本語文字も漢字・ひらがな・カタカナの三文字があって特徴的であるが、いずれにしても「中国語」といえば漢語・漢文字のみを指すことになると、こうした少数民族の多くの言語が抜け落ちてしまって、中国の文化の全体像を理解できなくなる。

宗教や信仰もさまざまである。チベット仏教（チベット、モンゴル、ユイグーなど）、小乗仏教（ダイ、アチャン、ドアン、プラン、ワー）、イスラム教（回、トンシャン、パオアン、ウイグル、カザフ、ウズベク、キルギス、タジク、サラ、タタールなど）、さらにはアニミズム信仰（精霊の存在を信仰する）やシャーマニズム信仰（呪術者による予言や病氣治癒）も存在する。多神教と言われる日本でも仏教と神道がほとんどで、留学生を除くとイスラム教はまったくといってよいほど見かけないと比べると、中国の宗教の多様性がよく分かる。

こうした少数民族に対して、中国は丁寧な政策を展開してきている。憲法では民族平等政策が取り決められ、民族区域自治法では民族区域自治政策がうたわれ、少数民族平等政策が実施されている。回覧している「中華人民共和国成立50周年記念・56民族大団結記念切手」が政府により発行されているのも、そうした政策が取られていることの一つの具体例といえる。

（2）モンゴル民族

さて、私の出身である内モンゴル自治区は中国北部国境に位置し、中国全体の面積の12.3%を占め、

全国第三位という広さである。それだけに自治区の東部、南部、西部では、黒竜江省、吉林省、遼寧省、河北省、山西省、陝西省、寧夏、甘肅省の8省と接しており、一方北部では蒙古国およびロシアと接し、その国境線は4,221キロにも達する。なお、自治区は省のレベルに当たる行政組織である。

内モンゴルには中国最大の草原と天然牧場があり、全国の27%を有している。産業は伝統的に牧畜、乳業、ウールやカシミヤの加工業が発達し、現在では冶金、石炭、建材、電子、紡績、皮業など幅広い業種が自治区の経済発展の柱となっている。伝統的な牧畜について言うと、「遊牧式」（季節によって一定の範囲内に移動する方式）と「定着化」（請け負い形で家族単位に牧場を与えるもの）がある。

住居形態としては「モンゴル・ゲル」（漢語では「包」）がよく知られている。食生活では、「チャカン・イド」（白い食べ物－乳製品）「ウラン・イド」（赤い食べ物－肉）という区別するのが特徴的である。年間の民族行事としては夏の「ナダーム」（娯楽・遊びの意）と旧暦の「オボ祭り」がたいへん賑わう。

言語で言うと、モンゴル語はアルタイ語系のモンゴル語族に属し、いくつかの方言グループが存在する。文字は17世紀から古いウイグル式モンゴル文字を使用しているが、「現行モンゴル文字」と、新疆オイラーとモンゴル族が使っている「トド文字」の2種類がある。

さて、二つの班に分かれての討議で出された質問には、中国の民族平等に関するものや、一人っ子政策に関するものなどがあった。それは、生徒たちの人権感覚が滲み出たものであるように思われた。



写真3 モンゴル民族衣装を着て中国の少数民族について話す

6. ペルーの民族と日系人社会（T A＝中村・五島パトリア）

（1）ペルーの複合文化

いま私（中村・五島パトリア）が話した言葉は何語か分かっただろうか。中国語でもない、英語でもない、フランス語でもない、スペイン語である。ブラジルの言語であるポルトガル語と少し似ているところがある。スペインとポルトガルは隣同士だからでもあろう。みなさんはあまり馴染みがないと思うので、スペイン語の日常会話を話してみよう。配布した「スペイン語のあいさつ」（付属資料2）を見てほしい。

さて、私は日系ペルー人三世である。祖父母が福島県出身で、私の苗字は父方と母方の苗字が二つ繋がっていて、名前がパトリアである。日系人の話をする前に、ペルーの概要をおさらいしておこう。パワーポイントによって写真も使いながら基本情報を整理してみた。

南米大陸の西側に位置し、太平洋に面するペルーは国土が日本の3.4倍で、国土の中央をアンデス山脈が南北に走っている。この山脈の西側は乾燥地帯で1年中ほとんど雨が降らない。東側はアマゾン川の上流地域にあたり、気温が高く雨の多い熱帯地域である。標高3,000メートル前後の高原が広がり、南アメリカ大陸にスペイン人が来るまでは、この高原でインカ族が勢力を拡大し、現在のコロンビア南部からチリ北部に達する広大なインカ帝国が栄えアンデス文明が確立した。1828年にスペインの植民地から独立し、今日のペルーとなった。

共和制のペルーは今、人口は約2,566万人、首都はリマ（Lima）で人口は約600万人である。1990年には日系二世のフジモリ国立農科大学学長が「誠実・勤勉・技術」をスローガンに掲げて日系人として初めて大統領選に立候補し、当選したことはみなさん知っているかもしれない。民族構成は、先住民であるインディヘナ（インディオ）45%、メスティソ（混血）37%、ヨーロッパ系（白人）15%、その他3%である。日系人はその他に入る。言語はスペイン語が中心であるが、山岳地域のインディヘナはインカ時代からのケチュア語を話す（ケチュア語はさらに北部の第一方言と南部の第二方言に分かれる）。チチカカ湖周辺の住民はアイマラ語を話す。スペイン語以外に38の言葉がある。ペルーも多くの民族の複合から成っていることが分かる。スペインの文化をまとめて言えば、ヨーロッパ文化とアンデス文化の混交である。各地域の民族の写真を見てほしい。なお、宗教は国民の81%がカトリックで、宗教の選択は自由である。

大変有名なペルーの世界遺産の写真もお見せしたい。ケチュア語で「世界の中心」を意味するクスコはインカ帝国の首都で、今もなお石壁や石畳に帝国時代の面影を残している。このクスコから列車で1時間、標高2,430メートルにある世界遺産マチュピチュ遺跡はインカの歴史を刻む神秘的空間である。その他、ワスカラン国立公園、リマ歴史地区、ナスカの地上絵もみなさんは本や雑誌、テレビで見たことがあると思う。

これはペルーの動物の写真である。ラマ、アルパカ、ビクニャ、コンドル、アナコンダ、プマ。また、ペルーの伝統的な料理として、新鮮な魚介類をライムでしめたセビチェをはじめ、ペルー版ポトフともいえるサンコチャド、あるいはロモ・サルタド、など伝統的料理は多様で豊富、日本人の好みにも合う。

(2) 日系ペルー人社会

ブラジル移民よりも9年早く、1898年に最初の契約移民790人がペルーに到着したのが日系人の始まりである。しかし、その後の排日暴動や日米開戦に伴う指導者たちのアメリカ収容所への強制収監や財産没収など、戦時中は日系人の苦労は並大抵ではなかった。それでも日本人移民は勤勉で誠実であるとの評価を得るに至り、大統領まで輩出するに至ったのである。

ペルーの日系人社会の間では様々な組織があり、最大のもはペルー日系人協会である。ペルーの日系人は自分の祖先の出身県により、それぞれの県人会のメンバーである。例えば私はペルー福島県人会のメンバーであり、そのほかに広島県人会、福岡県人会、岡山県人会、などがある。こうした県人会組織を核として日系人ネットワークが強固なものになっている。ペルーの日系人はいろいろな日本的行事を行う。例えばお正月にもち作りをし、夏に夏祭りを行うなどという行事をする。それらは世代を超えて日本文化を継承する貴重な機会となっている。

また、ペルーの日本人学校についても触れておこう。「リマ日本人学校」は「リマ日本語講習会」を母体として1971年に開学し、ペルー政府文化庁の許可を受けた。現在（2006年）、小学部37名、中学部14名の計51名の児童生徒と、校長1人・教諭9人（日本から派遣）、現地採用の教諭7人、他に事務職というスタッフである。日本の小・中学校と同じようなカリキュラムで学習しているが、小学校1年からの英語（週2時間）・スペイン語（週1時間）の語学学習が特徴的である。

さて、高校生たちの二つの班に参加してのやりとりでは、日本・ペルー・中国の日常生活の違いや、三ヶ国の民族に関する話し合いとなった。



写真4 ペルーの帽子をかぶってペルーの民族と日系人社会について話す

7. 討議

(1) 「多文化」化する社会と文化の対立・葛藤

最後の問い表2-Q4「『多文化』化する地域社会で、私たちは新たにどんなことを考えていかないといけないか？」を中心に、TAも含めた班討議が「展開Ⅲ」の段階である。この最後の問いに対して、高校生たちからは「外国人が多くなっている地域に目を向けること」、「異文化について知ること」、「異文化と交流すること」といった答えが出された。そうしたやりとりのなかでもっとも注目すべきだったのは、「多文化のなかでは対立が起きるのでないか。その対立をどう考えればよいか」という鋭い質問であった。おそらく、外国人集住地域ではこれまでさまざまな住民トラブルが発生し、愛知県内のケースもマスコミで報道されており、そうした情報を念頭においてのことであろうが、その質問は本講座内容の核心を突いていたからである。少数民族の立場から中国を紹介したTA賽漢卓娜は次のように応えた。「中国の場合で言えば、56もの民族がいれば対立葛藤が生じるのは当然のことである。それでも中国は多文化を当たり前の日常生活として受け入れ、全体として平和な状態を保っている」。ここには、言語を核とした民族の文化とは何かという重要な問題が潜んでいる。本講座は民族への注目に力点があり、民族文化の対立については十分論議することができなかったため、この点について補足しておこう。

通常「文化」は価値あるもの、美しいもの、望ましいものといった理解がなされていることが多い。確かに、生活行動様式としての「文化」は、④それに馴染んだ人々に安定感や安心感そしてアイデンティティをもたらす。しかし、それだけに⑤異文化相互のコミュニケーションは容易なことではない。各民族が保持する文化は異なっており、互いに触れ合うと意志疎通を欠きやすく、誤解や軋轢を生じやすいからである。これら文化の二つの側面のうち、⑤について梅棹(1991、12頁)は「文化とは、他民族に対する不信の体系である」と述べ、青木(1988、44頁)は「文化は人類社会の調和的發展にとっては、むしろマイナスの要因となる」と悲観的見解を論じているほどである。従来の国際交流や異文化理解の取り組みでは、どちらかといえば④の側面を中心とし、⑤の側面はあまり取り上げなかったのではなかろうか。あるいは、異文化とはあくまでお客様であり、一時的な滞日であり、いずれ母国に戻るものであって、日本人と接触するのも部分的であり短期的であるから異文化は隔離しておけばよく、文化の④側面だけを眺めておればよいと考えられてきたかもしれない。しかし、本格的に文化接触が現実のものとなると、必然的に⑤側面が浮上してくる。国際情勢を理解するには、そうした民族対立を文化の二つの側面から眺めることが不可欠である。民族紛争問題を異文化理解としてさらに深く認識するという課題である。そして、いかにして対立を乗り越えていくのか、を検討することはとりもなおさず日本の「多文化」を考える作業に連なるであろう。したがって、先ほどの高校生の質問は次の段階へと一歩踏み入れるものであり、「展開Ⅲ」において、高校生たちはすでに次の段階へと考えを及ぼし始めていたと言える。受講した附属高校生の一人が講座終了後に提出したレポートから抜き出そう。

「印象に残る言葉があった。TAの中国モンゴル民族である賽漢卓娜さんの『中国人はいない、中国語なんていう言語もない』という言葉だ。もし、この授業を受けていなくて、これを聞いたら、『じゃ何人？何語があるの？』と思わず尋ねてしまいそうだ。そのくらい私は中国という

国、民族について全く知識がなかった。そして、こうも言った。『民族には争いはもちろんあります。でも、それは、一つの国に56もの民族が住んでいるのだから当たり前でしょう。他の国に比べたら平和なものです』と。私も確かにそう思うが、3,000以上もの民族が分かり合える日は来るのだろうか、と少し虚しくなった。

でも、中国のような民族国家でしかないようなものにも気づいた。それは民族の誇りだ。卓娜さんや童さんは自分がモンゴル民族、漢民族であることを誇らしげに語っていた。すべての民族に民族衣装があるのもそのあらわれだろう。私は自分が『大和民族』であると考えたことはないし、これからもそれを改めて自覚することはないと思うが、それでも世界の民族、日本の民族について学べたこと、また、他の国の人々とたくさん話ができたことは、これからの宝になるだろう。

最後に、『多文化化する地域社会』について考えてみたいと思う。もし、どんどん日本に住む外国人の数が増えていったらどうなるだろう。もちろん友達になることもあるだろうし、近所に住むということもありえるだろう。そうなったときに、私たちが今まで“当たり前”だったことは当たり前でなくなる。中国では靴をぬがないで土足で家に入るという習慣だし、韓国ではお弁当をもちよって、つきあうのが当たり前らしい。それを知らなかったら“何だ、この人は…”とってしまうかもしれない。大切なのは、相手を知ることと同時に、相手の国、文化、宗教などでも、もっと民族の教育をしていかなければならないし、私たちももっと民族問題に関心をもって、自らすすんで取り組んでいかなければならないと思う。』

(2) 本講座の意義

さて、本講座の意義は以下の三つにまとめることができる。

① 引用したレポートにも書かれているように、高校生たちの反応を見ると、「国」と並行して「民族」にも目を向けるという本講座の目的はほぼ達成されたと考えられる。それは日本で依然として根強い「単一民族」ステレオタイプから脱却するために必要な視点である。これからも確実に外国人が増加するとの予測のもとで、地域社会を担う次の世代にとって、民族という視点の獲得は必須であり、人種・民族・国籍を弁別することは、異文化の理解にとって重要なことである。本講座を担当したTAを見るだけでも、同じ中国人に漢民族やモンゴル民族がいるし、ペルー人でも日系三世がいるということが分かる。それだけに異文化を理解するには国籍だけでなく、民族を見落とすことはできない。また、最近の日本では国際結婚が増えてきて、カップル15組に一組は国際結婚という割合である。そのカップルから子どもが生まれた場合、仮りに子どもの国籍が日本だとしても、子どもの文化は日本文化とフィリピンや中国、タイなどの文化との混交である。それぞれのケースで子どもの(民族的)アイデンティティが問われてくるだろう。当事者である子どもや親はこの重大な問題にどう向き合うか。また周囲の日本人はかれらのアイデンティティについてどう理解することができるか。

② 準備期間が短かったにもかかわらず、「世界の民族・日本の民族」に関する情報空間を教室に作り上げるための多くの教材・関連資料を集めることができた。TAの存在だけでなく、それらの資料は民族の視点を啓発させる情報装置となり、分かりやすい形で高校生の感性や思考に大

いなる刺激を与えたであろう。

③ 本講座はTAにとっても貴重な講座となった。国際交流や異文化交流イベントの経験はすでにあるが、民族に焦点を当てて母国の紹介をするのはめったにないことだったからである。TAの一人は次のように感想をまとめている。

「私（パトリシア）は以前様々な『異文化交流』イベントに参加し、ペルーの紹介をしたことがある。しかし、今回の講座は『民族』を中心にし、初めてペルーの民族について紹介した。そして、ほかのTAも自分の国の民族について紹介し、民族衣装や音楽の紹介をした。母国の資料を収集する時や、他のTAの発表を聞くたびに、世界各国の民族の文化の素晴らしさを感じつつ、自文化の再認識ができた。高校生を対象とする講座であったが、私自身にとっても非常に勉強になった。」

（3）本講座の課題

一方、本講座の課題は以下の四つにまとめることができる。

① 本講座は方法的に「参加型学習」を目指したが、我々の発表内容が膨らみ、時間が制約されていることもあって、「参加」の部分は質問とわずかな討議に限られ、不十分なままに止まってしまった。指導案にあげた班の討議や論点の整理は中途半端なままで時間切れとなった。テーマの大きさから言っても、これを第一回目として、第二～三回と次の学習へ発展させていくことが必要である。発展学習においてこそ「参加型」が生かされるであろう。たとえば、班ごとにいずれかの国に絞って民族構成を調べて発表する。日本のアイヌや沖縄、在日朝鮮・韓国の歴史や文化を調べる班も設ける。諸外国の調査結果と日本のそれとを突き合わせると民族についてどんなことが言えるだろうかについて討議をおこなう、など。

② 民族の対立・葛藤について、高校生から講座内容の核心を突く質問が出された。これは文化の二側面（A）（B）に関わるだけに、たとえば班ごとに地域を選び「紛争・民族・宗教」といったテーマで調べてみる。そして調べたことを基に、「紛争は解決できるか」といった問題をめぐってディベートをおこなう。その学習成果は世界を理解する強力な知識枠組みとなるだろう。

③ 今回は中国とペルーの留学生がTAとして話をした。名古屋大学にはこの他にも多くの留学生がいる。そうした人的資源をさらに活用する。たとえば、インドネシアやタイ、ネパール、あるいはフランスなどの留学生が同じようにTAとして「世界の民族」について語ったら、講座の論議はどうなるだろうか。また違う視点や側面が浮き彫りになってくるかもしれない。

④ 最後に、冒頭の問題に立ち返って「高大連携」の課題を指摘しておきたい。今回の講座については事前に附属学校に指導案（表3）を送って先生方の参観を呼びかけたが、日程の都合が合わず実現しなかった。指導者の狙いは、高校生の学習の様子を前にして高大連携のありかたについてぜひとも研究討議する機会にしたいと考えたのである。大学の授業公開や高校への出前授業は全国ですっかり定着しているが、進学選択の参考情報提供や受験生の確保といった範囲に止まっている。大学進学率が50%に達した今、高大連携にとって問われているのは、大学に進学することを前提にして、高校生の学力をどう捉えるか、高校では如何なる授業が必要か、大学では如何なる授業を準備する必要があるか、などについて高校・大学の両者が研究協議することでは

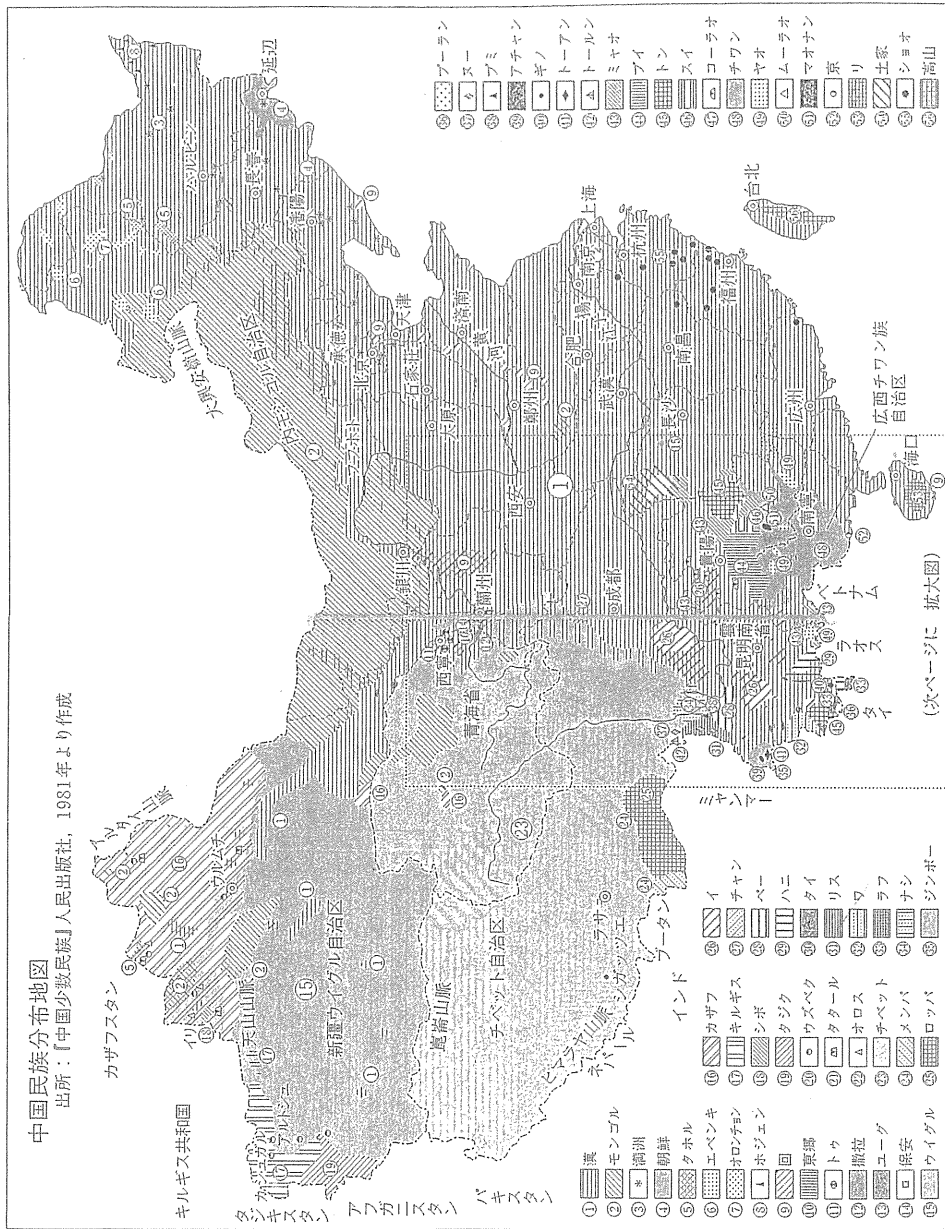
ないだろうか。そうした意味での高大連携はまだほとんど手がつけられていないと言ってよい。幸い、附属高校では「学びの杜」講座が単位化された。であるならばよけいに、高校生の実態に即しながら、学習内容や方法についての本格的な高大連携が積極的にはかれていくべきであろう。

【文献】

- 青木 保 (1988) 『文化の否定性』中央公論社
- 大学評価・学位授与機構 (2002) 『「教育サービス面における社会貢献」評価報告書』
- 藤本 強 (1988) 『もう二つの日本文化 —北海道と南島の文化—』東京大学出版会
- 速水敏彦・他 (2006) 『高大連携によるキャリア教育プログラム開発事業』名古屋大学教育発達科学研究科
- 今津孝次郎 (1993) 「異人・非人・外人・人間 —日本人のウチとソト—」中野秀一郎・今津孝次郎編『エスニシティの社会学 —日本社会の民族的構成—』世界思想社
- (1998) 「グローバル文化としての現代文化」井上俊編『新版 現代文化を学ぶ人のために』世界思想社
- (2001) 「『大学開放論』の構想」早川操編『大学院プログラムの多様化とその課題』名古屋大学大学院教育発達科学研究科 (教育科学専攻)
- (2003) 「オールドカマー・ニューカマー」中野陸夫編『人権教育小事典』明治図書
- 可児弘明・他編著 (1998) 『民族で読む中国』朝日選書
- クリステヴァ, J. (1990) 『外国人 —我らの内なるもの—』池田和子訳、法政大学出版局
- リップマン, W. (1987) 『世論』上、掛川トミ子訳、岩波文庫
- 的場正美・他 (2003) 「高・大接続のためのワークショップ『サマースクール2002』」『中等教育研究センター紀要』第3号 (2)、名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- 名古屋大学教育学部附属中・高等学校編 (2003) 『新しい中等教育へのメッセージ —ともに学びをつくる—』黎明書房
- 王 柯 (2005) 『多民族国家 中国』岩波新書
- 小熊英二 (1998) 『<日本人>の境界』新曜社
- 梅棹忠夫 (1991) 『二十一世紀の人間像 —民族問題をかんがえる—』講談社学術文庫


付属資料1 中国の民族分布図

(出典 王 柯 (2005)『多民族国家 中国』岩波新書、XII～XIII)




スペイン語のあいさつ

おはよう.....	Buenos Días ブエノス ディアス
こんにちは.....	Buenas Tardes ブエナス タルデス
こんばんは.....	Buenas Noches ブエナス ノーチェス
ありがとう.....	Gracias グラシアス
どういたしまして.....	De Nada デ ナダ
ごめんなさい.....	Perdón ペルドン
失礼します.....	Con permiso コン ペルミソ



自己紹介

Hola, yo me llamo <u>Patricia</u> . (私の名前はパトリシアです。)	
オラ、ヨ メ ヤモ パトリシア	
Mucho Gusto. (どうぞよろしく)	
ムチョ グスト	

愛知県内の外国人登録者の状況

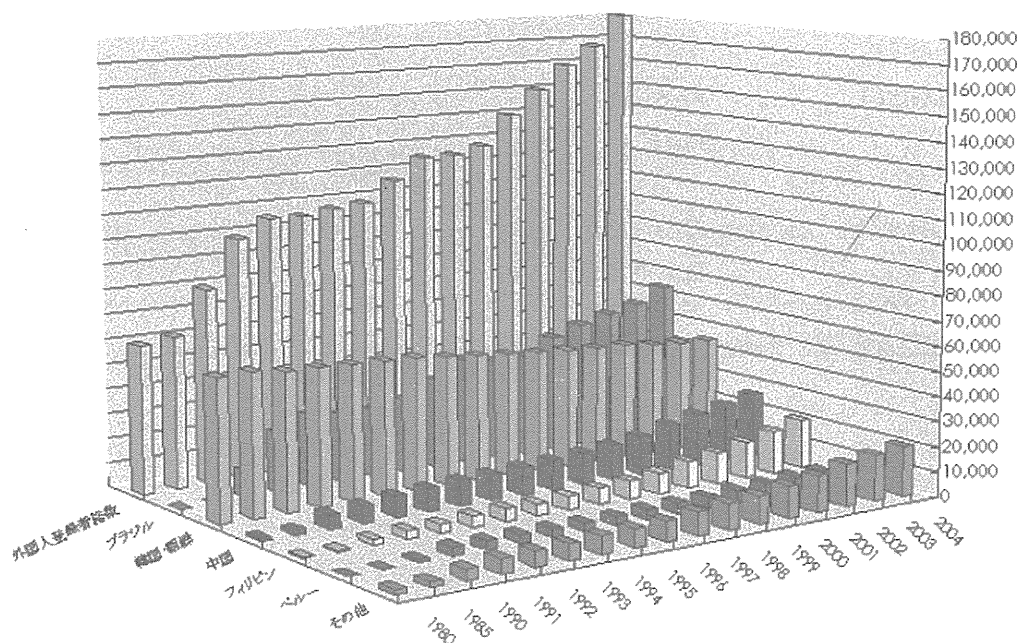
(各年 12 月 31 日現在 法務省発表数値)

○登録者総数

平成16年末現在の愛知県内の外国人登録者数は、179,742人で、過去最高記録を更新している。この数は、平成15年末現在に比べ12,472人（7.5%）の増加となっている。外国人登録者数の県内総人口7,192,000人に占める割合は、2.5%となっている。

		1988年(S63) 入管法改正前	1991年(H3) 改正入管法施 行翌年	1995年(H7)	2003年 (H15)	2004年 (H16)
外国人登録者数		62,967	98,363	107,931	167,270	179,742
総人口に占める割合		1.0%	1.5%	1.6%	2.3%	2.5%
主な国籍	ブラジル	248	24,296	29,787	57,336	63,335
	韓国・朝鮮	55,396	55,207	52,407	45,006	44,135
	中国	3,219	6,711	10,389	23,143	25,567
	フィリピン	1,208	3,273	4,650	17,197	19,863
	ペルー	15	3,262	3,366	6,384	6,987
	その他	2,881	5,614	7,332	18,204	19,855

外国人登録者数の推移



○国籍別内訳

外国人登録者の国籍数は、平成15年末に比べ1か国増加し、144か国（無国籍を除く）となっている。ブラジル国籍が63,335人で全体の35.2%を占め、韓国・朝鮮籍44,135人（24.6%）、中国籍25,567人（14.2%）、フィリピン国籍19,863人（11.1%）、ペルー国籍6,987人（3.9%）と続いている。

中国の民族 1 (1999年10月1日発行)

中国『中華人民共和國成立50周年 - 民族大團結』全56種類



Ethnicity in the World and Japan: A Trial Seminar for Senior-High School Students as an Open Class of the Faculty of Education in Nagoya University

IMAZU., Kojiro*, SAIHANJUNA **
NAKAMURA., G.Patricia ***, TONG., Jie***

Recently, "Opening Class" at universities has come to stay for the declining number of eighteen-year-old high school students in Japan. This openness at universities provides many opportunities. For universities, it helps to attract prospective students by providing them with more information about the university faculty, majors, and teaching methods. For high schools, it motivates their students to prepare for university life and gives the students more information so they can make better choices when deciding which universities to which they will apply.

This paper reports on a trial seminar, "Ethnicity in the World and Japan" which was offered to senior high school students as a summer open class by the faculty at College of Education, Nagoya University. Senior-high school students often learn about international understanding in their schools but they have little knowledge on ethnicity in the world and Japan. Therefore this seminar focuses on ethnicity comparing it with race and nationality.

Prospective students had an opportunity to take this seminar on a day of summer vacation in 2006. The seminar was two hours and thirty minutes and separated into three different lectures. The first lecture was on the changing ethnicity in Japan, which has not been the central concern among Japanese because of the notion that Japanese society is supposed to be uniform. The second lecture provided information on ethnicity in China and Peru through talks from three foreign graduate students. These graduate students are teaching assistants from Han, Mongolian, and Japanese-Peruvian. The third lecture gave the participants of this seminar an opportunity to discuss ethnicity in the world and Japan. At one point in the discussion, a senior high school student raised the important subject of the cultural conflicts. The Mongolian graduate student replied that conflicts are understandable as there are fifty-six different ethnic groups living in

* Professor Graduate School of Education and Human Development Nagoya University

** Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education and Human Development Nagoya University

*** Graduate Student of Master Course, Graduate School of Education and Human Development Nagoya University

China but overall it is peaceful among the Chinese people.

“Open Class” should be analyzed closely in terms of students’ academic abilities and the curriculum at high school and university by high school teachers and university professors in cooperation. By doing so, the higher education and high school education would be connected.